

ぜんこうじおおじしん
善光寺大地震
(緒川)

おがわむら いちのすけ
緒川村の市之助さんは、人一倍信仰心のあつ
ひと
い人でした。死ぬまでにいっぺん信濃の善光寺
まい
にお参りしたいというのが、市之助さんのかね
いちのすけ
てからの望みでありました。それは、小さいと
のぞ
きから何度も次のような善光寺の話聞かさ
なんど つぎ ぜんこうじ はなし き
れていたせいでもあります。

ぜんこうじ ひがし こもろ さと よくふか
むかし、善光寺の東、小諸の里に欲深なおば
はたら
あさんがいました。せつせと働くのですが、働
はたら
いてためたお金は、おさいせんにも出すこと
かね だ

おを惜しんで、お寺やお宮へお参りなど行ったこ
みや
ともありませんでした。

ところがある日のこと、おばあさんが布を
ぬの
さらして干しているとき、隣の飼う牛が逃げ
とな か うし に
出してきて、その布を角に引っかけたまま走っ
ぬの つの ひ
て行きました。驚いたおばあさんも、その牛を
おおじろ
追いかけて走り出しました。牛は、どんどん逃
うし
て行きます。おばあさんも、大事な布を取られ
だいじ ぬの と
ては大変と、必死になって牛を追いかけてました。
たいへん ひっし
そして、とうとう善光寺までやってきました。
ぜんこうじ
牛は、善光寺の境内にかけ込むと、ふっと姿を
うし けいだい こ すがた

消けしてしまいました。牛うしだと思おもっていたのは、

善光寺ぜんこうじ如来に様のけしん化身けしんだったのです。おばあさん

は、後あとに残のこされた布ぬのを手てに、これまでの自分じぶん

不信心ふしんじんを恥はじて、心こころをこめて善光寺ぜんこうじ如来に様さまにお

わびのお祈いのりをささげました。

それ以来いらい、「牛うしに引ひかれて善光寺ぜんこうじまいり」とい

う言葉ことばが生まれ、ほかのことにさそわれて、偶然ぐうぜん

によい方向ほうこうへ導みちびかれるという意味いみに使つかわれる

ようになりました。また、小諸こもろには、布引観音ぬのびきかんのんが

まつられるようになりました。

「牛うしに引ひかれてではなしに、自分じぶんから進すすんで

善光寺ぜんこうじさんにお参まいりに行いきたいものだ。」

と、緒川村おがわむらの市之助いちのすけさんは、いつも考かんがえていま

した。

ある年としのことです。やっとその念願ねんがんがかなつ

て、知多地方ちたちほうの同じ気持おなちの仲間なかまたち十六名めいが

連れ立つって、善光寺ぜんこうじ参まいりができることになりま

した。なんにしても、尾張おわりの国くにから信濃しなのの国くに

(長野県ながのけん)まで歩あるいて行くいのですから、それは

大変たいへんなことでした。それでも、ようやく松本まつもとを過す

ぎて善光寺ぜんこうじの手前てまえで宿やどをとることになりました。

いよいよ明日あしたは、善光寺ぜんこうじに到着とうちやくします。

いちのすけ
市之助さんは、念願の善光寺如来様にお参り

できるといいうわくわくした気持ちを押さえなが

ら眠りにつきましました。ところが、夜中に不思議な

夢を見たのです。枕元に観音様が現れて、

「わたしは、別所温泉の北向観音の観世音菩薩

じゃが、明日は、善光寺でよくないことが起

こりそうだから、こちらへ先に来たほうがよ

かろう。」とおっしゃるのです。

たまたま、宿で行き会った人たちから、北向

観音様が靈験あらたかな厄除けの観音様だとい

うことを聞き、帰りにでも寄っていこうと仲間

で話し合っている

たところですよ

で、さっそくあ

くる朝、仲間の

者たちにその夢

の話をしてまし

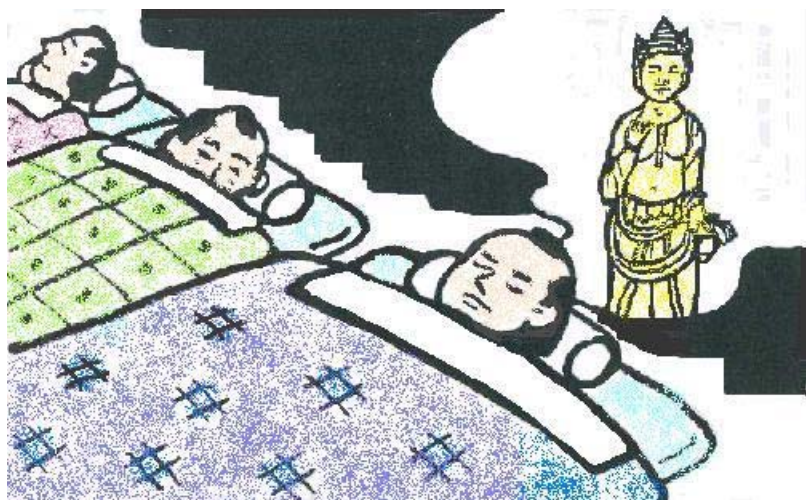
た。

「そういうわけ

だで、皆の衆、

予定を変えて、先に北向観音様にお参りしよう

じゃないか。



この際さい、観音様かんのんさまのお告つげをすなおに受うけたほううがよかろうが。」

「おいおい、おれたちや、善光寺参ぜんこうじまゐりが目的もくてきだぜ。そんなことをしたら善光寺如来ぜんこうじにょらいさま様たいに對し

て申もうしわけが立たつめえ。第一だいいち、おれは、そん

なお告つげを聞きいとらんぞ。」

「おれも、そんな夢ゆめなんぞ見みなかつたぞ。寝ねぼ

けたな、市之助いちのすけさあ。」

「おれが代表だいひょうでお告つげを受うけたんだらう。聞きけ

ば、北向観音きたむきかんのんさま様さまは、『厄除観世音やくよけかんぜおんさま様』といわれ

とるそうだ。これは、おれたちに降ふりかかろ

うとしている厄やくを除のぞいてくださろうというの
かも知しれん。悪いわることは言いわねえ。皆みなの衆しゅう、
どうかおれといっしょにひとまず別所べつしょの北向きたむき
観音かんのんへ行いつてくれ。たのむ。」

「おやおや、市之助いちのすけさ、いよいよ本気ほんきらしいな。

ばかばかしい。そうまで言いうなら、お前まえさん

ひとり行いつたらどうだい。」

とうとう話はなし合あいがつかないままに、市之助いちのすけ

さんだけが別行動べつこうどうをとるようになりました。

「三日後かごに、またこの宿やどで会あおう。では、皆みなの

衆しゅう気きをつけてのう。」

「市之助いちのすけき、お前まえこそ氣きをつけなよ。お前まえさんのがおそんこないのには、恐れ入いったよ。」

こうして、市之助いちのすけさんは、その日ひのうちに北向きたむき観音かんのんのお参まいりをすませ、仲間なかまの身みの上うえを氣きづか
いながら、その夜よるは、別所温泉べっしょおんせんに泊とまったので
す。ところが、その夜よの明あけ方がた、激はげしい地震じしんが起お
こつて、別所べっしょの人ひと々の眠ねむりを覚さまさせました。
弘化四年こうか ねん（一八四七）三月二十五日がつ、歴史れきしに名高なだか
い善光寺ぜんこうじ大地震おおじしんです。

あくる日ひ、市之助いちのすけさんは、不吉ふきつな予感よかんを押おさ
えながら善光寺ぜんこうじにかけつけてみますと、十五人にん

の仲間なかまの者ものたちは、倒たおれた善光寺ぜんこうじの宿坊しゆくぼうの下敷したじ
きとなつて、無惨むざんな姿すがたになっておりました。涙なみだ

ながらに仲間なかまの者ものたちのなきがらをほおむつた
後のち、危あぶないところを助たすけてもらった北向きたむき観音かんのん様さまに
は、改あらためて心こころからのお礼れいを申もうし上げると、大おおき
な絵馬えまを奉納ほうのうして帰かえりました。

この時とき、市之助いちのすけさんが奉納ほうのうした地震じしんの難なんを逃のが
れる絵えの描えがかれた大おおきな絵馬えまは、「弘化四年三月こうか ねん がつ
二十六日にち、尾張国知多郡新田市之助おわりのくにちたぐんしんてんいちのすけ」の名なで、今いま
でも長野県上田市ながのけんうえだしの別所温泉べっしょおんせんにある北向きたむき観音堂かんのんどう
に掲かかげられています。